

座談会

『協同組合』役職員を 実感する機会とは

協同組合の職員は、経営者であり、かつ組合員と組織の連結者であると言われている。日本における多くの協同組合では、規模拡大によって組合員との距離が大きくなるなか、役職員は日々の業務をこなすことに時間をとられ、「協同組合に関わっている」ことを実感する機会を得ることが難しくなっているのではないだろうか。協同組合として事業や活動を展開するために、職員の役割は非常に重要であり、役職員自身が日々の業務の意味を感じながら関わるができる組織となっていくことが求められている。

マネジメントなどの業務に関する研修・学習はもちろんであるが、協同組合理論を学ぶ研修や学習も不可欠であり、多くの協同組合では研修や学習の機会を提供している。しかし、座学による学びが、現場の実務と結びつけることが難しく、協同組合の理論が絵に描いた餅になりかねない。いったいどのような研修や機会があれば、役職員が「協同組合」を意識し、自身の業務の意味づけをすることができるのであろうか。

今回は、農協、生協連、地域生協、大学生協から、役職員教育の取り組みの中でも、協同組合職員として、自身の仕事

の意味をもたせるような研修や機会提供に取り組んでいる協同組合の関係者をお呼びし、その目的や課題について議論することとした。2018 年 4 月 1 日には、全国の協同組合間協同をより発展させるために「日本協同組合連携機構（略称：JCA）」が発足することとなり、組合員だけでなく役職員も異業種協同組合から学ぶ機会も増えるのではないだろうか。年度末のこの時期に他の協同組合の取組みを参考にしていただければ幸いである。

「くらしと協同」副編集長 青木美紗

